
振られるための告白

海星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

振られるための告白

【Nコード】

N6094Z

【作者名】

海星

【あらすじ】

高1の渡辺希は、ある昼休み、同じ部活の二年の先輩に告白された。そのときかさなって思い出されたのは、夏休み前の三年の先輩への告白だった。

（前書き）

アドバイスやコメントをもらえると嬉しいですよ。

昼休み。廊下にはちらほらと人が歩いている。

私の目の前には、同じ部活の山田先輩が立っていた。

お昼を食べた後、いつも通り友達我真弓と机でしゃべっていたとき、クラスメイトの男子が私のことを呼んだ。

「先輩がよんでるよ」

気のせいだろうか。そう言ったクラスメイトは、少し動揺しているかのような顔をしている。

私の頭の中に浮かんだのは、生徒会の人顔だった。私は学級委員なので、よく生徒会の先輩にクラスへの伝言を頼まれるのだ。

「誰？」

「二年生」

変な返事だな、と思った。誰と聞いているのだから、名前で答えればいいだろう。それとも生徒会の先輩の名前を知らないのだろうかと思いつながら、教室を出ようとする。

そんな私に、もう一言男子は付け足した。

「階段のところに来てだつて」

一気に教室がざわめくのが分かった。「告白？」という言葉が飛び交う。私はいつもなら「そんなわけない。きつと廊下のところで手伝うものがあるのだろう」と思うところだが、実は少しだけ、心当たりがあった。

おとといのこと。私は夕飯を食べてから、あるSNSのサイトを閲覧していた。つぶやいたり、それにコメントしたり、写真や動画を載せたり、チャットをしたりすることができるこのサイトは、私の通っている学校のほとんどの人が利用している。私も中三の頃から利用し始めた。

いつも通り友達のつぶやきを読んだ後他のページにとぼうとしたとき。チャットで話しかけられていることに気づいた。

急いでチャットを開いてみる。話しかけてきたのは山田先輩だった。

『渡辺さん。今日は部活おつかれー』

チャットで先輩から話しかけられることは初めてだった。なんか連絡があるのかなと身構えて返事を続けた。

結局その日は雑談で終わった。

そして翌日サイトを開いたら、チャットの最後のほうで『ケータイのアド教えて』と書かれているのに気づいたのだ。

特に断る理由も無かったので私は教えた。その日は夜遅くまでメールが続いた。その内容は、昨日と変わらない雑談だった。

私は恋愛経験が少なかった。片思いをしたことや告白されたこと、告白したこともあったが、付き合ったことというのはなかった。恋愛のアピールをしたこともなかった。たいてい、アピールする勇気が出ずに、告白してふってもらいあきらめようとするか、そのまま何もせずにいたのだ。

そんな私でさえ「もしかして……」と思い始めていた。でもただの気まぐれかもしれない、とも思った。私の友達に、委員会の先輩と言っただけでメルアドを聞き、メール交換をしているという人がいたからだ。

とにかく私は誰かに相談したいと思い、明日、真弓に話してみようと決意したのだ。

動揺しながら教室を出る。

そのまま階段のほうへと向かった。階段には、だれもいなかった。拍子抜けして、そのまま階段の向こう側まで行ってみる。角をまがった。そこに、山田先輩はたっていた。

「渡辺さんのことが好きです。付き合ってください」

一瞬の間を置いて、山田先輩はそう言った。どきりとした。夏休

み前のことが思い出された。

私は夏休み前に、同じ部活の三年生の川上先輩に告白していた。三年生の引退試合の後。私は川上先輩のことが好きだ、とはつきりと自覚した。でもどうしたらいいのか分からず、家に帰るまでずっと一人でぼーっとしていた。

そして、真弓に電話した。真弓は今までに何回か付き合ったことがあるようだった。そして真弓には同じ部活の先輩である兄がいた。ちなみに真弓も同じ部活だ。

返ってきた答えは意外なものだった。

「二学期が終わったら三年生はもう学校こなくなっちゃうじゃない？ その前に告白しなきゃ。ちようどもうすぐ夏休みだし、告白しちゃいなよ。もしオツケーだったら夏休み遊べるし、ダメでも顔を合わせずにすむでしょ？」

びっくりした。そんな急でいいのか、とも思った。でも、夏休みの間顔を合わせずにすむというのには同意できた。まあつまり、真弓の意見は「振ってもらって新しい恋に向かえるようにしよう」というものだ。「消極的だな」という前に、私には「だれかと付き合っている自分」というのが想像できないでいた。そんな私にとって「告白」とは「振ってもらうこと」だった。

そしてそれは終業式に実行された。誰にも見られなくなかったし、先輩にも迷惑をかけちゃいけないと思ったので、メジャーだが体育館裏に呼び出してもらうことにした。呼び出してもらったのは、真弓の兄だった。

結果、振られた。「他に好きな人がいる」ということだった。泣いたりしなかったが、その日は一日中暗かったと思う。

しかし「振ってもらって新しい恋に向かえるようにする」ことはできなかった。

つまり私は、いまだに川上先輩のことが好きなのだった。

「好きな人がいるので……」

私の口からとっさに出たのはその言葉だった。言ってから、約四ヶ月前の出来事とかさなつてずきりとした。私が返した返事は、川上先輩から受けたものと、まったく同じだった。

「そっか、それじゃあしょうがないね」

山田先輩は少し顔をゆがめてそう言った。途端に、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

どうしたらいいか分からずにしばらく立ち尽くしていたら、先輩が「……うん、じゃあね」と言った。私は「これからも先輩後輩としてよろしくお願いします」と言おうとした。しかしうまく言うことができなかった。

教室戻ったら、たくさんのクラスメイトが「なんだった?」「誰だった?」と聞いてきた。怖くなって逃げて、隅っこに行った。そして他の人には聞こえないよう、真弓にだけには報告した。川上先輩のときあれだけお世話になったのだから、話さなきゃと思ったのだ。

メールのこと、なんと言われたか、なんと返事したか、すべて話した。真弓はなによりも、私が川上先輩のことがまだ好きなのだという事に驚いていたようだった。そして最後に「ドンマイ」と言った。

山田先輩からのメールはもう来ないだろうと思っていたのだが、数日たったあと、またメールが来た。相変わらぬ雑談だった。私も何も無かったかのように返事をした。

山田先輩の告白の言葉も、私の返事も、全部私が川上先輩にしたのと同じものだった。でも、私は振られるために告白したのに対し、山田先輩はちゃんとアピールのようなものをしてくれた。それはとても大きな違いだと思った。

約一ヶ月が過ぎた頃、山田先輩からのメールはもう来なくなっていた。

今度から、きちんと恋愛に向き合おうと私は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6094z/>

振られるための告白

2011年12月20日18時52分発行